

## 男共よ 「女性の立場」で考えようを促されるな

本誌のバックナンバーで「女性」で検索したら、20年以上前の1998年9月号のこの欄で「『女性差別』をどのように語ろうか？」という記事を書いていた。

記事によると、「ある女性企業経営者から、本誌の表紙写真に女性が出てこないのは『女性差別』であるとの批判を受けた。そして、「創刊から32号に渡って男の顔がズラッと並んでいるのを見れば、女はこの雑誌を絶対に買わない！」と言われてしまった。でも、これまで女性を取上げなかったからといって差別などとは思わない。それは単に確率の問題に過ぎないからだ。しかし、

そのために女性読者に本誌の敷居が高くなるというのであれば、それは問題だ」と。

なんでこんなことを書くかという、先日、本誌執筆者の一人でもある榎田みどりさんにお目にかかり、榎田さんと農家・農村での女性問題について話題になったからだ。

昨年12月、農水省女性活躍推進室が「女性の農業における活躍推進に

向けた検討会」報告書というものを出版している。榎田さんはこの報告書をまとめる検討会の座長なのだ。この検討会の目的は「農業や農村に女性を呼び込み、発展させていくため、女性農業者が活躍できる環境を整える具体的方策を検討することだ」。

以前にも書いたが、そもそもこのテーマにかかわる「家族経営協定」という制度が出てきたとき、「なんでもそんなことまで国が口出しをするのか」と疑問を差し挟む記事を書いている。初めて農業・農家に職業的に接するようになった40年近く前、あるいは本誌創刊当初なら「女性差別」も男である僕にも感じないわけではなかったが、それは今も同じ問題なのか。それも行政がかかわるようなことなのかというのが正直な感想である。日本の社会に「女性差別」が存在することは事実だと思っし、それは変えていかなければならない重大な社会問題である。

ただし、同時に僕自身がこういう感想を持つこと自体に差別を受けている女性の置かれている立場に鈍感なままにいる自分がいるのではないかという問いも持っている。

しかし、98年9月号でも、本誌は「被害者としての農業や農村あるいは農民をどう守るか」ではなく、「現代日本の社会で、農業およびその経営主体としての農業経営者のアイデンティティー（自分という存在の独自性への自覚）を確立すること」「農業を経営として成立させること」をテーマとする雑誌であると書いている。むしろ、農業や農業経営に対して国や行政が補助金というエサをぶら下げながら農家や農業経営に関与しすぎ、それが農業経営者の自立性が育つのを妨げていると主張する雑誌である。

また、最近の記事でも昨年の9月号で、「種苗法改正で日本農業はよくなる！（後編）」という特集に合わせてこの欄でも「貧農史観」よ、さようなら」という記事を書いている。掲載から1年を経っていないので、読者でない方の場合ネットで読むには100円課金されるが、本誌の立場をよくご理解いただけるはずだ。

とはいえ、男にとって女性差別の問題とは自覚しにくい問題である。であればこそ、対女性というテーマに限らず己ではなく相手の立場でモノを見て、相手の立場で考えることを、多くの場合男性の比率が高い農業経営者たちは忘れるべきではない。それは農業経営者の義務である。

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。